

大岡昇平における〈京都〉  
 ——木橋を踏む淋しさと愛する疎水の風景——

How Kyoto is Depicted in the Novels of ŌOKA Shōhei:  
 The Landscape that Spoke to his Solitude and Love

花崎 育代\*

**Abstract**

This paper deals with two individuals who were not originally from Kyoto nor travelers to Kyoto, who made their home there nonetheless: ŌOKA Shōhei (1909-1988) and TOMINAGA Tarō (1901-1925). Both were raised in the Shibuya district of Tokyo. How did these two people, dedicated to literature and hailing from Japan's modern capital of Tokyo, view and think about the former capital Kyoto in their youth? The old capital has its own particular charm, stemming from its wooden bridges. This charm is reflected in the epigraph of ŌOKA's *Seishun* ("Youth," 1934), which comes from a poem by TOMINAGA, who died young. From his earliest days there, then, ŌOKA was hyperconscious of the differences between his hometown and his adopted city. These feelings were refined in the extreme situations ŌOKA faced over his decade-long stay there, including his service in the Second World War, and the suicide of his "old friend," SAKAMOTO Mutsuko. ŌOKA's long residence in the land of his "rebirth" produced the literary work *Kurokami* (Black Hair) in 1961. Its female protagonist decides to go on living rather than kill herself,

\* 立命館大学文学部教授

inspired by the canals of Kyoto which flow north – the opposite direction of the water flowing down into the basin from the surrounding hills. This serves as a verification of ŌOKA's description of Kyoto as a place of “regeneration.”

## はじめに

大岡昇平（1909（明 42）—1988（昭 63））は、東京生まれではあるが、周知のように京都帝国大学で学生生活を送った。上洛初日は当時の京都市長土岐嘉平の官舎に泊まっている。土岐嘉平（1875（明 8）—1946（昭 21））は大岡の遠縁で名付け親であり、昇平がその名の一字をもらっている<sup>1)</sup>、という人物であった。その大岡の京都での生活は、後年、「ひと月で家へ帰ってきたくなっちゃう」「年の三分の二は東京ですごして<sup>2)</sup>」と言うような腰の落ち着かないものではあったが、作品生成にかかわる記憶や記述には看過できないものがある。それはたとえば恩師の横光利一の新聞連載小説「寝園」（『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』夕刊、1930（昭 5）・11～12<sup>3)</sup>）を毎夕、京都の酒場で読んだ記憶が鮮明に残っている、と述べる（「横光先生の初期作品」、1981（昭 56）・10）のみならず、特に印象的だったと明言する霧に包まれた作品冒頭を、後年、引用するかのような最終場面をもつ大岡作品『酸素<sup>4)</sup>』（1952（昭 27）・1～1953（昭 28）・7、1955（昭 30）・7刊）を挙げるだけでも得心できるであろう。

本稿はこうした大岡がその創作の実質においてどのように＜京都＞を表象したのかについて、単なる“ご当地趣味”的表現を超えた問題として、戦前の「青春」、そして「青春」のエピグラフにその詩を選んだ富永太郎、さらに女性を主人公とする「黒髪」等から考察していく。

## 「青春」

「青春」（1934（昭9）・5～7、中絶）は、大岡自身の京都帝大時代を下敷きにした小説である。ここで大岡は冒頭、「京都」の「風物」の特徴を次のように記している。

三方山に塞がれた無風帯、此处では煙は真直に立騰り折釘型に曲つて、棚引くのだ。軒傍からふと挙げる視線はただ薄青くかすんだ山肌に打突かるばかりである。邸宅の門はひっそりと閉されてゐて、夜、陰気な格子戸の奥で仕立て屋の職人は夜業にいそしんでいる京都。あまりに白すぎる土の色、古風な網附電車が低い家並から現れてのろのろと向うの橋を渡る。立並ぶ柳の古木の不吉な表情、それから至る処松、松、松——／彼等が愛するのはただこの疎水の水の眺めだつた。

「折釘型に曲」り「棚引く」「煙」。後年、大岡は「渋谷という環境に埋没させつつ、自己を語る」として自伝的小説『幼年』（初出タイトルは「わが生涯を紀行する」、1971（昭46）・1～1972（昭47）・11、全六回。1973（昭48）・5刊）を發表している。「私の少年時代は主に渋谷で過ごされた」ではじまるこの作品で大岡は、渋谷という土地、その播鉢型の地形の谷底を「郷里感覚」の原点としている<sup>5)</sup>。そしてこの『幼年』で大岡は、幼年時に見ていた渋谷方向に流れる発電所の煙をきわめて鮮烈な記憶として語っている。

筈町の家から残った最も鮮明なイメージは、通りの向い側の低い屋根の上に、遠く聳える煙突のイメージである。夕焼けの空を背景に、くっきりと黒く、突出していた。それはふだんはぼつんと立っただけだが、どうかすると盛んに煙を吐く日があった。煙は風に吹かれて一方に倒れる。その方角が変わったような記憶はない。いつも右のほうへ、つまり

北に倒れたような気がする。「発電所」の煙突と教わっていた。(中略)  
 /その黒い煙突が黒い煙を吐き出すと同時に、私を取り巻く世界全体  
 が、なにか動き出すような内部感覚が、私の中に起るらしいのである。  
 (『幼年』)

「青春」では四十年近く後の『幼年』のように明確に煙を意味づけてはいない。しかし、「折釘型」の煙の棚引きへの注視は、『幼年』執筆よりはるかに前から、自己の幼年記憶として強く想起されるものとしての「郷里」渋谷の煙が存在し続けていたことを示している。京大在学中、上京を繰り返した大岡だが、小説の中での風物として、折釘型の煙を特記したことは、まず既知の「郷里」と同質のものを生活者として未知の土地に見出そうとし、そのようにして順応しようとしたといえる。

しかし一方でむしろ、「京都」は「渋谷」でも東京でもない。富永太郎の京都滞在時作成の詩「橋の上の自画像」の一節「靴穿きで木橋を踏む淋しさ」をエピグラフに選んでいる大岡である。富永太郎は大岡と同じく渋谷に住み成城学園で友人となった富永次郎の、1925(大正14)年に二十四歳で夭折したばかりの兄として大岡の前に詩人としてあらわれた。木橋を靴で踏む「淋しさ」は、まずは、「昭和四年」、東京の「S七年生高等学校の卒業生」として京都帝大に入学する「青春」の青年たちが親元から離れる「自由」とともに感じた「淋しさ」の表徴であったろう。じっさい大岡は後年次のように述べている。

「靴穿きで木橋を踏む淋しさ」、これは、京都に行った連中の気分を出したつもりです<sup>6)</sup>。

しかし、作品「青春」が述べる「淋しさ」はそれだけではない。富永太郎の原詩ではしかも正確には末尾に感嘆符「！」がつき、丸括弧「( )」で括られている<sup>7)</sup>。感嘆し強調しつつ控えめに括弧で括るという二重性。こうした

複雑な表現で記された富永太郎の詩の感情を括弧も感嘆符も取り去ってストレートに「淋しさ」を示したエピグラフを置いた大岡である。「軒傍」から視線を挙げると三方を囲む「山肌」にぶつかってしまう、それを「塞がれた」と表現するのは、エピグラフに「淋しさ」を選ぶマイナス感情から出た閉塞感的違和感であるといえる。

京都が東京と異質であるという認識は、土壤への注視からもうかがえる。大岡は後年、再三、関東ローム層の土が赤—黒いことを述べている。たとえば「家一帰郷」(1951(昭26)・3)。大岡は父の郷里和歌山に対して東京の渋谷、世田谷への親近を次のように記している。

今日の私の因循な性格を作ったのは、むしろ幼児から育った渋谷、世田谷の赤土と霜柱である。

あるいは『幼年』の末尾。渋谷地区の人口拡大によって「国鉄線路の西側」に住む大岡が新設の大向小学校に転向した1919(大正8)年、五年生時の記憶である。

転向後最初の図画の時間に、窓外に見える赤土と菜の花の黄色のある田園風景を写生したのを覚えている。

一方で、京都大学構内等、現左京区付近を含む京都市街地は、比叡山の花崗岩が風化した石英の白い土質が特徴的である<sup>8)</sup>。「あまりに白すぎる土の色」は、赤土を見慣れ、後にそれによって「性格を作った」といわしめるほど馴染んできた大岡であればこそ、それとの差異としての「白すぎる土の色」に強い印象を持ったのであり、それが戦前期の小説における京都表象に記されることになったのだといえる。自らが立ち、歩き、過ぐす地面そのものが違うことでの、まさによって立つ場所の違和を描くことで、若い学生たちの

劇が、生粋の京都人ではなく、上洛した東京人が京都の人々といかに交流していくかを含めた群像劇として書かれ始めていくことを示しているのである。その場所に定住している人間であれば、あるいは特記しないであろう土地の差異への注視は、そうした大学時代という期間移住者の視点からみた京都であることを明示しているのである。

### 京の街の眺め

「青春」では八坂神社正面石段上から西方の四条通を見渡す場面がある。小説内でまず氏名を伴って登場する「株式仲買人の息子」(一)である岸本信雄<sup>9)</sup>、その下宿先隣室の友人高木禎一が早朝、外出する。

彼は知恩院を抜け、丸山公園に足を踏入れる。夜通し空いている飲屋の間を通り、射的屋の前を過ぎ、八坂神社の石段の方へ歩いていく。其処はもう京都の一番繁華な通りの始りで、有名な祇園の遊郭が、電車通を挟んで両側に拡がっている。一瞬彼は石段の上に立止り、街を眺める。彼が心持眉を顰めるのが見てとられる。すぐ石段を降りて電車を横切り、市場の方へ歩き出す。ふいに彼は横丁を曲る。／ああ、何たることだ。気を附ける高木。そつちはこの祇園の中でも一番下等な、ほとんど女郎屋といつてもいい、家が並んでいる方角ではないか。(二)

後年、大岡は高木のモデルは加藤英倫だが「女郎買いに行くのは僕です<sup>10)</sup>」と述べている。その高木が八坂神社の石段上から街、すなわち西を眺める。高木の目に映るのは、西山の連山ではなく、京の町を東西に横切る四条通の左右、すなわち南北に遊郭があるという近場である。「女郎屋といつてもよい家」の方角へと歩を進める高木は、「作者」によって「気を附けろ」と批難気に忠告される。

京都生活を経た大岡が、後年、郷里の東京渋谷を描いた『幼年』の中には、少年時に宮益坂の「上」から渋谷の谷底をはさんで西方を眺める場面が出てくる。早朝ではなく夕方であり、特記するのは近場の風景ではなく遠景である。大岡自身が作中、「宮益坂と道玄坂は、渋谷川をはさんで相對し、常に一對として考えられていた。」と書く、渋谷の坂の底部から東に延びる宮益坂中腹より眺める西側の光景を印象的に記している。

私のはじめて富士山を見たのも、この坂からである。今日では渋谷駅の谷は、都内有数の排気ガスの溜り場になっていて、宮益坂から富士山が見える日は、数えるほどしかあるまいが、当時は、御嶽神社あたりまで登ると富士が見えた。行きにそれが見えないとしても、夕方、服部君の家のけいこ場で相撲を取り終わっての帰途、坂に出ると対面の道玄坂の上に、赤い夕焼け空を背景に、黒い輪郭が浮んでいるのが見えた。画の手本で見るとは富士ではなく、寂しい影絵であっても、本物の富士山を見ることに私は満足した。 (『幼年』)

むろん、同じように大岡の行動をもとにしたとはいえ、盆地のなかで特に大きな高低差のない四条通東の八坂神社石段上と坂の町渋谷の宮益坂上とをまったく同列において考えることはできない。遠景上空か近景家並かの違いもある。さらに宮益坂―道玄坂の記憶は想起し執筆発表しているのは成年以降であっても、初発の経験自体は少年時のものであるなど、身体経験の年齢の差異もある。しかし、「上」から西方を眺めた時に、何を考え、どのような表情をとったと記したのか、どのような感慨を得たと記したのか、は、一人の作家が、旅行者としてではなく、生活した土地において自らの足によって見出した身体的記憶の表現としてきわめて興味深い。谷間の空間である渋谷とその外部をつなぐアップダウンの歩行によって谷の上から西方を眺める書き手大岡の身体経験。それは、富士は無論見えない京におけるの視

線を、軒端から突出した高山ではない「山肌に打突かる」のでなければ、盆地のなかに比較的平坦に広がる京の町の西方の眺めを直近の町のありさまとして捉えさせたのである。

### 靴穿きで木橋を踏む淋しさ

「青春」の冒頭「一」章は、先述のように、富永太郎が京都に滞在していた1924（大正13）年7月に創作した詩（初出『山繭』創刊号、1924・12）の一節「靴穿きで木橋を踏む淋しさ」で始まっていた。原詩「橋の上の自画像」を引用しておこう（／は改行、／／は行空き改行）。

今宵私のパイプは橋の上で／狂暴に煙を上昇させる。／／今宵あれらの水びたしの荷足は／すべて昇天しなければならぬ、／頬被りした船頭たちを乗せて。／／電車らは花車の亡霊のやうに／音もなく夜の中に拡散し遂げる。／（靴穿きで木橋を踏む淋しさ！）／／私は明滅する「仁丹」の広告塔を憎む。／またすべての詞華集とカルピスソーダ水とを嫌ふ。／／哀れな欲望過多症患者が／人類撲滅の大志を抱いて、／最後を遂げるに間近い夜だ。／／蛾よ、蛾よ、／ガードの鉄柱にとまつて、震へて、／夥しく散乱して死ぬべし、死ぬべし。／咲き出でた鋼板の赤ランプは／おまへの看護には過ぎたるものだ。

この詩が富永太郎京都在住の1924（大正13）年作成だからといって、むしろ京都を舞台とした作品だと明確に言いうる表徴はないといってよい。「荷足」船は関東中心のものというのが一般的である。また「仁丹」広告塔は鴨川沿い三条、四条、五条にあった<sup>11)</sup>だけでなく、渋谷に生育した富永太郎の東京にもむしろ多く存在したのである。同じく渋谷育ちの大岡昇平は先に引用した『幼年』の後続期を記す『少年』（1973（昭48）・4～1975（昭



50)・12、1975・11刊)では、大正中期、青山学院中学に通う大岡少年がやはり仁丹の広告塔を印象的に記している。同じく宮益坂上から道玄坂方向を見る「私」である。

宮益坂の上から道玄坂のほうを見て、第一に眼につくのは、坂の左手の大和田上にその頃建った仁丹の広告塔である。大礼服を着て、髭を生やした高官の半身像が、この大衆薬のシンボルで、二階家ぐらいの大きさで、渋谷の空を圧していた。夜はイルミネーションが点滅して一層印象的であった。  
(『少年』「第五章 青山学院」)

宮益坂上から西方を見る幼年時代の大岡が遠方の富士山に着目し感動を覚えたと同想したのに対し、より「青春」期に近づく大岡少年が、近景の街の上方に注目したと記憶を語ることは興味深いのだが、ここにみるように東京渋谷の印象的風景として語られる「仁丹」は、必ずしも京都に特化した表象だということとはできない。

このように「荷足」や「仁丹」が関東や東京をも表徴しうる存在であるのに対し、「青春」で大岡も注視した富永の「木橋」には、近代日本の首都であり、創作発表時のいま、1923（大正12）年の関東大震災後の新建造が進む東京よりは、〈古都〉の趣をこそさしめす語であるといえよう。

その「木橋」、であるが、〈古都〉京都であっても、中心的な橋の多くは明治から大正期にかけて鋼やコンクリート製に架け替えられている<sup>12)</sup>。ただたとえば富永がその河畔をよく散策した鴨川にかかる五条橋は木橋であった<sup>13)</sup>。

京都についた直後の書簡で「ここへ遁走をしてしまった<sup>14)</sup>」と述べる太郎である。この富永の詩は、敢えて江戸期—近世以前から多く存在する「木橋」を選び、かつ「靴穿き」という西欧的近代の身体を接触させ、その違和を表象して「淋しさ」と感嘆符付きかつ丸括弧を施して記しているのである。

## 疎水への愛着

夏から秋にかけて京都に滞在した富永太郎は、疎水で泳いでいたと記している。

下宿の前の疎水の少し上に腰までほどの深さの泳ぎ場をみつけた。今日はそこで泳いだ<sup>15)</sup>。

大岡はこの書簡について「岡崎公園付近の疎水本流の眺めが富永の気に入ったようである<sup>16)</sup>。」と特記している。冒頭引用したように、大岡戦前の「青春」では、白い土や三方山、木橋に「淋しさ」を表出させていた一方で、「疎水の水」は「愛する」と記していた。

彼等が愛するのはただ疎水の水の眺めだつた。傾いた市中を縦横に張り廻された疎水の水の、大きな団りの儘、ぐんぐん休みなく動いて行く水の眺めだつた。

フィリピンから復員後の明石疎開時代の大岡が富永次郎に宛てた1947(昭和22)年6月22日付書簡の影印と翻刻が公開されている。ここでも疎水への愛着が強調されている。

南河原町はいゝ所だ。水の流れる印象が強い。上の疎水へ上つたら前に一度行つたことのあるところだつた。疎水がトンネルからトンネルまで十間ばかり出てゐるところ<sup>17)</sup>。

大岡の作品に水が重要な役割を果たしていることについては、夙に、岡田喜秋<sup>18)</sup>や丸谷オ一<sup>19)</sup>が指摘している他、大岡自身もたとえば「水」(1957

(昭32)・1)で自覚的にこれを述べてもいる。京都の疎水についても「気に入る」として記している。

京都に下宿して大学に通った頃、私の気に入りの散歩道は、南禅寺から銀閣寺に至る疎水に沿った道であった。(中略)ここの道から京都の町の眺望が美しく思われるのは、この水の伴奏があるからである。人工の流水は、ある意味で、自然の水の流れより刺激的な眺めである。

この疎水についてきわめて印象的な描き方をした小説が「黒髪」(1961(昭36)・10)である。「黒髪」については論じたことがあり<sup>20)</sup>重複を避けるためここで纏説はしないが、南禅寺裏の家を出て新制高校沿いを歩く主人公の久子は、そういう言い方をすれば、「青春」の高木が八坂神社の石段から四条通を眺め渡したと同じであるかのように西方を望む。

十月の終りで校庭を取り巻く木々は、すべて紅葉していた。上るにつれて、傾いた秋の陽に的礫と光る京都の屋根の眺めが拡がって来る。遠く西山が陰になって、青く霞んだ輪郭を連ねている。／坂を上り切ったところは、南禅寺の裏山の隧道で貫いて来た水が、一間ほどの水路にひしめき合い、ゆるやかにカーヴを取って流れて行く。その水の速い動きを見ていると、久子はいつの間にか自分が興奮しているのに気がついた。村井と別れたってこわいことがあるもんか、と改めて力んだ気持ちになった。

久子は、高木が作者によって危惧されるような否定的な行動をとる人間として書かれることはない。幾度も自死を思い、自殺未遂経験がある久子だが、西山を眺め、疎水沿いに歩きながら、「改めて力んだ気持ち」で前を向こうとしている。久子は歩き続ける。

彼女はふとこの水に随いて行ってみようと思った。この疎水が、京都盆地の水流の方向と逆に山際に沿って銀閣寺まで北流し、迂回してきた白川から上賀茂一帯の田畑をうるおしているのを知っていた。／水に沿った道を、水の流れに送られるように歩いて行く。

大岡は、富永太郎の詩に導かれ、「木橋」に象徴される風物に「淋しさ」を感じ、東京の赤黒い土とは違う「あまりに白すぎる土の色」や富士山のような突出した山はないが「三方山」の地形に閉塞と違和を感じている。しかしそうしたマイナスイメージの一方で、疎水の水を「愛する」と語っていった。それは北へと鴨川と逆方向に流れる「人工の流水」である。大岡は、京都の近代化の一大事業であり自然に逆行して「ぐんぐん」流れる疎水に、首都としてまず近代化を推進した東京に通じるなにかの力を見出したということではできるのかもしれない。そうした力を感得したことが、京都の疎水を、作中、自殺未遂経験のある女性が、生きていこうとする原動力として、すなわちプラスの価値を有するものとして、いきいきと描かしめたといえるのである。

## 注

- 1) 「叔母 [大岡蔦枝—花崎注] は四、五年前、若いころ自分にいい寄る男があったことを私に語った。それはTという、後に祖母の姪と結婚した同郷 [和歌山—花崎注] 人である。彼は私達の親類の中では、一番ましな経歴を持っていたと、いえるかも知れない。政務次官、知事、北海道長官、今上の御大典当時の京都市長であった。ついでに言えば、私の名昇平は、この人からつけて貰ったものである。下の「平」の字をもらっているので、少しなめられたのかと思っていたが、他人には下の字を与えるのが正しいのだそうで、これは一応折目正しいつけ方である。」(大岡「叔母」1965(昭40)・6)、「津久戸前町二七番地に住んでいた親類土岐嘉平の家」「土岐嘉平もやはり同県 [和歌山県—花崎注] 人で、父と同じ明治八年生れ、東大政治学科卒、内務畑でかなり出世した人である。石川県知事、高知県知事を経て、関東庁事務総長、北海道庁長官、昭和三年今上の即位式の時の京都市長だった。」「私の名前「昇平」は嘉平さん(私たちは土岐のおじさんと呼んでいた)につけて貰った。「平」の字をもらっただけが、

近いものには上の「嘉」を、遠いものには下の「平」を与えるのが定りで、これは折目正しい名前のつけ方だそうである。」(大岡『幼年』(1971(昭46)・1～1972(昭47)・5(季刊)、1973(昭48)・5刊)「一」)、「京都に行った。そして当時、僕の名付け親であり遠縁に当る同郷の和歌山県人土岐嘉平が京都市長ですからね、市長官舎へ富永〔太郎の弟、次郎一花崎注〕と二人で泊まって、」(大岡昇平「インタビュー 京都時代と、その前後」(きき手：池田純益、『早稲田文学』814号、1983(昭58)・5)、等。

なお、土岐嘉平は第十代京都市長、就任期間は1927(昭2)年12月13日から1931(昭6)年12月12日までである。

- 2) 大岡昇平「インタビュー 京都時代と、その前後」(同注(1)文献)
- 3) 大岡が読んだ『大阪毎日新聞(夕刊)』では、11月7日(金曜日)第「1」回以降、月曜日夕刊休刊を除き、12月28日まで全42回連載。なお11月15日、11月26日、11月27日は休載。
- 4) 横光利一『寝園』と大岡昇平『酸素』のかかわりについては拙稿「大岡昇平における横光利一・覚え書——『寝園』『機械』『母』を手がかりに——」(『横光利一研究』第6号、2008(平20)・3)で論じたことがある。
- 5) 『幼年』の他『武蔵野夫人』『野火』等に武蔵野の谷間の風景が重要な個所が出てくることも含め、渋谷一谷一底を起点とした大岡の記述については拙稿「大岡昇平における〈心象〉の地形——『幼年』を中心にして」(『日本近代文学』第56集、1997(平9)・5。2003(平15)・10、双文社出版、拙著『大岡昇平研究』所収)にて考察したことがある。なお、「青春」の「煙」への言及としては辻邦生「大岡昇平とスタンダール」(『国文学』1977(昭52)・3)が『幼年』との関係で指摘している。
- 6) 大岡「インタビュー 京都時代と、その前後」(同注(1)文献)
- 7) 富永太郎の引用は村井康男編『富永太郎詩集』(1927(昭2)・8、富永次郎発行)に拠った。なお大岡昇平編『富永太郎詩集』(1972(昭47)・4)、編集ノート=大岡昇平『現代詩文庫 1006 富永太郎詩集』(1975(昭50)・7、思潮社)を参照した。
- 8) 専門外の知見については慎重を期すべきであるが、京都市街地は白川扇状地堆積物、鴨川扇状地堆積物をもつ(京都府環境部自然環境保全課「京都府自然環境目録2015(地質402種)京都市・乙訓地域」)が、白川系河川は比叡山地南辺の風化花崗岩地盤を流れる(富井眞・吉江崇・伊藤隆夫・外山秀一・上中央「第四章 京都大学北部構内BD28区の発掘調査」、『京都大学構内遺跡調査研究年報』2007、2007・3)。大岡が通った京都帝国大学や居住した地域である「岡崎周辺の扇状地をかたちづくるのは、東山から主に白川を介してもたらされたマサ(風化花崗岩)やチャートである。なお、当地域と同様に白川扇状地に位置する京都大学構内では、完新世を通じてマサによる土石流が頻発したことが報告されている。」(小野映介・藤根久・森将志・黒沼保子「京都盆地東縁の白川扇状地における更新世末以降の堆積環境の変遷」、『日本地

- 理学会発表要旨集 二〇一六年度秋季学術大会』セッション ID : 506)。
- 9) 後年大岡は「岸本は富永を、モデルにしています。」と富永太郎の弟、次郎がモデルであることを述べている。(大岡「インタビュー 京都時代と、その前後」(同注 (1) 文献))。なお大岡も「株式仲買人の息子」である。
  - 10) 大岡「京都時代と、その前後」(同注 (1) 文献)
  - 11) 四条、五条橋詰にあった仁丹電飾広告はたとえば、日本初の絵はがき流通の明治 33 年以後の絵はがきから京都を観察した森安正編『絵はがきで見る京都—明治・大正・昭和初期—』(2012 (平 24)・7、光村推古書院)が、絵はがきに映り込む四条橋詰の広告を掲載(11 頁)している。明治末、鴨川橋詰大礼服姿の仁丹広告写真を掲載の上これを「醜悪なる広告」として批判した記事『東京朝日新聞』(1910 (明 43) 年 7 月 6 日付)を引用しつつ検討した論考に井出文紀「森下仁丹の町名表示版広告と「広告益世」」(『商経学叢』第 64 巻第 2 号、2017 (平 29)・12)がある。
  - 12) 「京都市の橋の変遷 ①」(京都市建設局橋りょう健全推進課発行『京の道しるべ』第 7 号、2015 (平 27)・3)には「明治 40 年代になると木材に代わり、鋼やコンクリートを用いた橋が多く建設されるようになり、永久橋化が進みました。」とある。文献には、江戸時代京都市中にあった百を超える公儀橋について、これらが明治期に入って京都府管理下に置かれ、架け替えが行われたことが示されている。木橋は堀川中立売の「堀川第一橋」は明治 6 (1873) 年に、堀川下立売の「堀川第二橋」は明治 7 (1874) 年に、と早い時期に、それぞれ石橋に架け替えられたことが記されている。
  - 13) 「写真の五条大橋が開通したのは昭和 34 年 3 月。それまでは木造の橋であった。」(66 頁「五条大橋」写真キャプション)(浅野喜市・写真『昭和の京都 回想 昭和 20 ~ 40 年代 光村推古書院、2010 (平 22)・12)、「五条大橋は、昭和 34 年に架け直されるまでは木製であった。」(70 頁「五条大橋から鴨川上流を望む。」写真キャプション)、「当時の五条大橋は木造であった。」(226 頁「五条大橋を渡る神輿。」写真キャプション)。(株式会社いき出版企画・制作『写真アルバム 京都市の昭和』(2016 (平 28)・12) 所収。)
  - 14) 「とうとうこゝへ遁走をしてしまった。遁走の結果はどうなんだか知らない。」富永太郎 1924 (大正 13) 年 7 月 7 日付村井康男宛書簡。京都市浄土寺西田町発。(大岡昇平『富永太郎——書簡を通してみた生涯と作品』(1958 (昭 33)・10 ~ 1960 (昭 35)・10、1971 (昭 46)・6、1974 (昭 49)・1。1974・9 刊。) 所収)
  - 15) 富永太郎 1924 (大正 13) 年 7 月 10 日付正岡忠三郎宛書簡。京都市浄土寺西田町発(同注 (1)「京都時代と、その前後」)。正岡は府立一中、第二高等学校を通じての富永太郎の同期生である。
  - 16) 『富永太郎——書簡を通してみた生涯と作品』(同注 (14) 文献)
  - 17) 「インタビュー 京都時代と、その前後」(同注 (1) 文献)に掲載。書簡は二百字詰「創元社原稿」に記されている。なお富永家は太郎没後、湧水の地である東京小金井に

転居している。

- 18) 『作家と風土』(築地書館、1956(昭31)・11)
- 19) 「水と大岡昇平——大岡昇平文学紀行」(1970(昭45)・7、学習研究社刊『現代日本の文学36』所収)
- 20) 拙稿「大岡昇平「黒髪」考——「花影」・「青春」・近松秋江——」(『創造と思考』第9号、1999(平11)・3)

附記 特記しない限り、大岡昇平の文言の引用は『大岡昇平全集』全23巻別巻1(1994(平6)・10～2003(平15)・8、筑摩書房)に拠った。ルビは省略した。

